

## コメント

## モノに立脚した新たな比較文化論の構築に向けて

Possibility of the Comparative Culture by Things

加藤 幸治

KATO Koji

## 1. モノの領域横断性

筆者は、文化を表象するメディアとしての物質文化の可能性は、領域横断的な議論のアリーナ形成の一点に尽きると考えてきた。ある物品が意図的なまなざしで選択的に抽出され、モノとして認識されるとき、それが考古資料であるか、民具であるか、歴史資料であるかは、そのモノへのアプローチによる呼称の差異にすぎない。ある出土遺物は、考古学者が層位をふまえた型式による理解を試みれば考古資料となり、庶民生活の歴史的展開を明らかにする民俗学者がみれば民具となり、そこに線刻された文字を読み解けば歴史研究に資するであろう。また、ある地域で玄関先に貼られているひとつの呪物に目がとまるとき、そこから思い描かれる世界は、考古学者、民俗学者、文化人類学者、社会学者、歴史学者、保存科学者など、その属性によってまったく違ったものとなる。この今さら言うまでもないような物質文化の領域横断性が、現実の学問においては驚くほど没交渉的である。

従来の物質文化論は、個別の地域研究に囲い込まれてきた。また、民俗学の民具研究と文化人類学の物質文化研究、考古資料による歴史・文化研究のあいだには、交流が乏しい。こうした研究状況を脱却するためには、領域横断的な研究素材としての物質文化の本来的なあり様を再認識し、そこを基点に新たな文化研究の枠組みを提示する多分野の協働が求められる。フィールドワークによって研究資料を獲得する文化人類学・民族考古学・民俗学・歴史学・文化地理学が、それぞれのアプローチで物質文化の動態的記述を試みる本研究プロジェクトは、現代の学問の縦割り状況の弊害を逆照射するであろう。

現代は人・物・情報のグローバルな高速移動が可能となり、人々の直接的・間接的なコンタクトの機会の増大によって文化間の相互理解の重要性が問われている。異文化の無批判な表象から国家間の利害衝突にいたるまで、さまざまな問題解決において比較文化論に対する社会的ニーズも多様化している。こうした現代的状況において、人文学は人々のより身近な日常の現象に着目し、そこから当該社会を展望し、他地域との比較において自らを認識する「自己／他者認識」を問うことの重要性を提起できる。文化の相互理解は、社会の安寧と幸福の追求の基盤であり、人々にとって最も身近な対象から問題意識を立ち上げる物質文化論はそれに貢献しようと、筆者は信じている。

## 2. それぞれのアプローチ

本研究プロジェクトでは、東アジアをフィールドとしたさまざまなケーススタディの集積によって、物質文化論の可能性が模索されてきた。

榎林啓介氏は、先史中国における稲作文化の形成と伝播についての見方を一元論から多原論にずらし、試みとしてイネ遺存体等の遺物だけでなく、農耕具を中心とした「栽培体系」を表象する遺

物からも検討を加えた。言説とモノの文脈のずれから社会を分析するのが、近現代を対象とした物質文化研究の手法だとすれば、言説を分析しえない先史を対象として、複数のモノの文脈が示すズレに着目した点は、素直におもしろい。むしろ、イネ遺存体のデータをもとにした中原地域の文化中心史観そのものが、言説にからめとられた結果であることが読者に認識されるであろう。物質文化研究の利点は、言説の相対化にあるが、多くの場合その分析の視座は言説にからめとられがちなのである。

角南聡一郎氏の研究は、日本の穴あき銭が台湾原住民をはじめ東アジア各地で威信具として用いられていることを明らかにした。東アジア各国の、考古遺物、伝世品、歴史資料、絵画資料を、縦横無尽に使って描く方法論は名人芸に近いが、人々が物流として意識しないところで、モノが広範囲に展開していくことの興味深さを再認識させるもので、今後も多分野による共同研究によって深化させていくべき枠組みである。

小熊誠氏は、これまでの沖縄と福建における亀甲墓の調査をベースに、背後にある風水の思想の具現化、流行と人々のニーズの高まり、それへの墓職人の対応などについて、比較検討した。それぞれの地域の歴史的な分析が、比較研究として展開するためには、交易や移民などの人・物・情報の流通の状況が結果的にモノにどのようなあられるのかを考えるためのフレームワークが必要であろう。この亀甲墓の研究は、そのことを明確に再認識させられるものである。

芹澤知広氏は、東アジアに広くみられる紙銭を切り口に、手作りの紙銭から工業的に製作されるものまで幅広く調査し、比較検討した。モノの受容過程に差異を生み出す要素として、政策や同時代の様々な価値転換、商品や流行といった文化経済的要素の影響などが、慮外にできないという見通しを得たことは、意味論や象徴論に終始してきたこれまでの紙銭の研究とは一線を画す。

志賀市子氏は、Q版神仙と呼ばれる神像を切り口に現代台湾の媽祖進香活動ブームと「文化創造」の動向の調査をベースに、伝統文化を資源化した現代のモノ作りと信仰の実践についての比較研究を提示した。とりわけ観光や文化振興などへの積極的な対応としての台湾における「文化創造」の動向は興味深く、さらにそれによって生み出された物品が人々の生活の個別のコンテクストに位置付けられて独り歩きしていく点は、文化の動態的な記述へと向かう切り口となろう。

中尾徳仁氏は、これまでの中華世界の民間版画の実物資料の調査をベースに、中国各地の職人の製作技術についても調査を進めている。これまでの生業の比較研究は、単なる製作技法や素材の差異しか見てこなかったが、受容される社会の価値や嗜好、労働観や道徳を慮外にできないことが今後明らかになると予想される。

こうした内容もフィールドも多岐にわたる共同研究であったが、いくつかの共通項を見出すこともできる。その共通項は、領域横断的な議論のテーマとなりうるもので、共同研究の成果と言ってもよい。以下、筆者なりにそれらを挙げてみたい。

### 3. 新たな研究分野開拓の萌芽

上記のようなケーススタディは、一見まとまりのないもののように思えるであろう。事実、研究会でも発表者は個別研究の報告をしているように錯覚したかもしれない。しかし、コメンテーターという一歩引いた立場で参加していると、多くの領域横断的な研究課題が内包されていることにすぐに気付いた。

ひとつは、文脈に依存する記述と比較による脱文脈化の記述のふたつをいかに節合するかに、どの報告者も苦心している点である。前者はモノグラフ的あるいはエスノグラフィー的な調査法であ

る。後者は文化史的、ある面では考古学的かもしれない。ミクロな世界に立脚するなかで資料が収集され、それが図らずも他の地域との関連性を持つ、そういった素材をどう扱うか、その苦悩は、物質文化論の可能性の模索でもある。

内容的な面では、モノと言説の相補的な関係について、物質文化からアプローチする試みもあった。例えば田園趣味や博物趣味といった19世紀的な興味は、現実世界のモノの編成に大きな影響を及ぼしてきた。現代では、環境主義（趣味？）や文化の客体化・資源化といった思考が、商品のありようを大きく規定している。必要なモノと言説の相補的な関係は、物質文化論からの貢献が見込まれるテーマである。これには近代史との連携が必要であるが、現在の学問状況にはそれは不在である。

モノの複製・量産体制とモノの個別化（カスタマイズ）も興味深い内容である。生産方法や素材の改良によって複製生産技術が発展するなかで、人々は在来の宗教的規制や儀式への依存から離脱しつつも、新たな芸術的な実践に依存していくというのは、ベンヤミン以来の古典的なメディア論である。ミクロな生活の実践においては、複製品へのフェティッシュな依存は個々人の嗜好や説明されるものであるが、それを文化的・経済的状況の制約においてしか説明しようとししないのが、現代のフィールド科学の特色でもある。筆者の個人的な意見では、現代の民俗誌／民族誌の多くは現地の人々自身が認識可能な世界を編集しているに過ぎないと感じられる。モノの使用実践という観点から、これをずらしていくことはできないものか。

それと関連することとして、痕跡（trace）としての物質文化という筆者の問題意識からも、研究会では多くの興味深い事例を見せていただいた。筆者は指標と痕跡について以下のように書いたことがある。

人・モノ・情報の「流通」という問題意識においては、様々な一過性のモノが重要な意味を持つ。そこでは民具は系譜論におけるある段階を代表するメルクマールではなく、いわば特定の時代の特定の状況の痕跡（trace）を示すものである。系譜論との決定的な違いは、人々の生活の歴史的展開は状況依存的であるという前提にあり、その個別の状況（＝生活世界）の論理が技術やモノを逆に規定していくような推移を念頭に置いている点にある。（加藤幸治 2012 『紀伊半島の民俗誌』 社会評論社、36頁）

人々が生活の実践のなかでは大して意識しないような、些末な身体動作、道具の使用、道具や商品の選択といったことは、実はインタビューしても語り得ない事柄である。人間は生活のすべてをみずから説明することはできない。生活のなかから様々な興味深い痕跡を見出すのはフィールドワーカーの仕事である。痕跡としてのモノを生活世界からフィールドワークによって抽出し、それを比較研究することができれば、人々がみずから説明しえないことを、調査者は説明しうる可能性がある。そして、モノの文脈が提起するものは、言説を相対化させてくれるはずである。

本共同研究で残念に思ったことがある。この共同研究は「モノの専門家」でない諸分野のフィールドワーカーが、モノを基点にフィールドを描いてみるところに楽しさがある。そしてそれが、考古学や民具研究の硬直した部分に注入できるカンフル剤を作り出すことになる可能性がある。だから、報告はうまくまとめあげる必要はないし、むしろどうしてこれまでのモノの研究はこういう面を扱わないかといった批判が期待された。

ただ、いくつかの報告は、「物質文化研究をやらなければ」という意識が働いたために、従来の物質文化研究に依拠する傾向も見られた。物質文化研究の土台は、フィールドワークである。フィ

ールドワークに長けた今回の研究会メンバーは、その研究スタイルを無駄に変えることなく、すこしだけフィールドにおける物質的な世界の編成に目を向けてもらって、そこから記述しうる現地の生活を提案すれば新しい視点が獲得できるのではないかと感じた。

#### 4. フィールド学の連携による領域横断的な物質文化研究に向けた提案

この研究会にコメンテーターとして参加して、筆者は人・物・情報の流通による新技術や知識の地域的受容の過程でいかなる文化変化が起こるのかについて、物質文化を通して明らかにする比較文化の研究という、新たなビジョンを獲得することができた。筆者の研究における「流通民具論」とも共鳴する部分があり、逆に多くを学ぶことができた。ここでは、コメンテーターという本務を逸脱して、ここに新たなフィールド学の連携による領域横断的な物質文化研究に向けた提案として、“方法論的フェティシズム”“人・物・情報の流通による比較文化論”という二つのキーワードを提示しておきたい。

##### 1) 方法論的フェティシズム

1990年代以降、文化人類学・民俗学の物質文化論において影響力を増してきたA・アパデュライの「方法論的フェティシズム」の枠組み(Appadurai, Arjun. ed. 1986 *“The social life of things”* Cambridge University press)の有効性が影響力を持ち始めている。これは、人間の行為の側からモノを理解するのではなく、モノの側から人間の行為を理解するという態度であり、モノの意味づけに介在するイデオロギーを相対化するところに主眼がある。モノには、人々によって意味づけられると同時に、人々の生活はモノに規定されるという両義性がある。アパデュライは、その両義性への視点によって、国民国家や言語集団、民族文化といったカテゴリに規定されることなく、モノを基点にした人と人の関係を記述できるというのである。しかしモノの自立的な文脈の視点を得たと同時に、実生活の文脈から乖離することは避けられず、人間不在となるジレンマに陥ってしまう。物質文化論の課題は、モノの文脈とモノグラフ的な視点をどう接合するかという点にある。本研究プロジェクトは、この点を検討するためのフィールドワークの必要性を明確にした。

##### 2) 人・物・情報の流通による比較文化論

これまでの伝播論や系譜論をはじめとするさまざまな社会科学のモデルに依拠するのではなく、人々のミクロな生活の現場において新たな文化がいかに受容されたかを考える「受容論」の態度の重視性が、本共同研究では再認識できた。異なる地域の似た事象やモノを比較してその共通性や差異を見出すのではなく、新技術や知識の地域的受容のありかたの違いが文化変化を方向づけ、結果的に差異が生まれるという仮説に立脚することで、その受容において働く価値が何なのか、人々は何を重視し、何を変えて何を変えないのか、それをミクロな生活世界から記述することで当該社会を理解し、それを比較することで文化変化のありかたを検証することができるのではないか。

具体的には、近現代社会における人の移動や交流によって、移住先でどのように民具に代表される物質文化が変化していったか、現地への適応過程がどのように推移していったかについて検討をおこなう。これは極めて状況依存的であり、伝播論や系譜論では解き明かすことはできない。また社会集団からこれを研究すると、その流動性ゆえ主体を見出すことが困難であるばかりか、政治・経済的な種々のバイアスを相対化することができない。物質文化によって描かれる生活像は、人・物・情報の流通のダイナミズムとして描かれるであろう。

## 5. おわりに

本共同研究は、国際常民文化研究機構のプロジェクトとしては2011年度で調査・研究期間を終える。しかし、この研究会で築かれたモノを素材とした比較文化論の土台を埋もれさせてしまうのは、あまりにもったいない。この枠組みを発展させ、さらなるフィールドワークによってひとつの方法論にまで高めることが必要であろう。筆者は、東アジアをフィールドにしたケーススタディを集積し、個別の地域研究を脱却した比較文化論の理論的基盤を形成することが、この研究会の議論を基点にキックオフできるのではないかと確信した。それが、この共同研究によって結実した果実ではなかったか。